

自然誌 だぶり 夏

Natural history

三重自然誌の会情報誌 97号

2013年 9月

スイレン鉢に発生した貝

松阪市嬉野の竹田憲治さんは、自宅に直径50cmほどのスイレン鉢を置き、小型の蓮を育てています。2011年4月末、竹田さんに蓮の株を分けてもらうことになり、中川明さんから松阪市魚見町にある畑の土を譲ってもらいました。

今年になって竹田さんから「スイレン鉢に小さなタニシのような貝が発生してきた。」という情報をいただきました。どんな貝だろうかと期待し、2013年4月21日、竹田さん宅を訪れました。夕刻で見つけにくかったのですが、ようやくヒラマキガイモドキ *Polypylis hemisphaerula* (Benson, 1842) を確認しました。竹田

さんは、「このような貝ではない。もっと硬い殻のタニシのような貝だ。」と言ってしばらく探すと、5mmほどの小さな貝を渡してくれました。私の手のひらに乗せていただいたのは、なんと、ヒメマルマメタニシ *Gabbia kiusiuensis* (S. Hirase, 1927) です。本種は、兵庫県以西の本州、四国、九州全域の概ね瀬戸内海を取り囲む地域の水田や水路、湿地などに生息します。しかし、分布域でも生息地が極めて限られているようで、三重県からは記録がない種類です。

私の家のスイレン鉢では、竹田さんに株分けをしてもらったにもかかわらず全く発生していないので、これらの貝がどのような経路で侵入したのかは不明です。

最後になりましたが、今回、貴重な情報の提供をいただいた松阪市嬉野在住の竹田憲治さんに深謝いたします。



写真1 ヒメマルタニシが発生したスイレン鉢
(松阪市嬉野).



写真2 ヒラマキガイモドキ(生態).



写真3 ヒメマルタニシ (生態).



写真4 ヒメマルタニシ.

〈中野 環：度会町大野木 1711-1〉

北勢地域におけるススキに類似のイネ科植物

市 川 正 人

ススキによく似た植物に、ワセオバナやトキワススキ、ハチジョウススキ、エノシマススキ、オギなどがありますが、識別される機会は一般に多くないようです。しかしながら、種の多様性は環境保全の基本ですので、多くの人が彼らの世界に興味を持ってくれることを願っています。そこで、これらの植物についての分布と同定のポイントになる特徴を紹介したいと思います。なかでもススキが同定の基本となりますから、まずはススキの形態的特徴を把握しておく必要があります。全体の大きさや形、葉の幅や模様・縁のざらつき、葉舌や葉耳の様子、葉鞘の毛の有無、果実を覆う白い毛や芒の長さ等々です。ススキにも生育環境の影響でかなりの変異が見られますが、身近に手に入るススキのこと、よく観察しておきましょう。



写真1 トキワススキ

はじめにワセオバナですが、上記5種の中でこれだけが *Saccharum* 属で、他は *Miscanthus* 属です。生長後、総(花序の軸からでる多くの小穂をつける細長い部分)は小穂(果実とそれを包み込んだ部分)をつけたまま、節で折れる特徴があります。他の4種は生長後、小穂が独立して軸からとれます。また、花序の総は軸に対して目立って離れて着いています(この特徴はトキワススキも同じ)。最初の出会いは、2008年に愛知県弥富市と三重県桑名郡木曽岬町の県境、木曽川左岸堤防で、三重県初記録となりました。後の調査で近くの弥富市地内の筏川沿いに生育していることを確認し、2009年には桑名市長島町の木曽川右岸や多度町の揖斐川右岸にも登場しました。

次にトキワススキですが、名前の通り、なかには冬越しをする葉が見られます。花期はススキにくらべて一か月ほど早いのですが、県内で初めて出会ったのは2011年に四日市市末永町海蔵川に架かる末永橋近くで、定期的に除草される堤防では5月に花を咲かせていました(写真1)。

ハチジョウススキは全体が大きく、注目すべき特徴は葉の縁がざらつかないか、ほとんどざらつかないことです。他と比べ、一般的に葉幅が広いことも特徴の一つです。県内では南勢地域の海岸近くで見かけますが、残念ながら北勢地域では出会っていません。磯津漁港近くの四日市市吉崎町に群生のものを一時はハチジョウススキと見ていましたが、どうやらトキワススキのようです。

エノシマススキはススキとハチジョウススキの雑種とされ、両方の中間的な特徴を呈するもので、いなべ市藤原町坂本の川縁に生育しているものがこれにあたるようにも見え、また他でもたびたびこのタイプに出会いますが、近くにハチジョウススキがなく未だに解決に至っていません。

最後にオギを紹介します。他の4種は株立ちしますが、オギは地下茎を伸ばし一本立ちします。また、芒は無いか、有っても短く目立ちません。多くには固い毛が下部の葉鞘にあることも特徴です。河川敷や湿った荒廃地に普通に生育しています。

ススキの特徴は上記の5種と比べて、普通は中型で株立ちをします。葉には中央、縦に白い筋があり、縁はひどくざらつきます。小穂は白い毛に覆われますが、芒は長く突出して目立ちます。花期は8~10月で、総の大部分は花序の中軸に束になってつきます。風媒花であり、風によって種子散布されることは他と同様です。ススキにはイトススキ、タカノハススキ、シマススキ、ムラサキススキなど多くの品種があります。ススキとオギの雑種、オギススキと呼ばれるものもあるようです。

(いちかわ まさと：四日市市堀木4-1-5)

ヒバカリの『尾の自切』とおぼしき行為について

上 田 利 彦

ヒバカリ (学名 *Amphiesma vibakari vibakari*) は、全長600mmほどで、背面は淡褐色あるいは茶褐色で、口角から頸部にかけて淡黄色の帯が入る、スマートな感じのヘビです。里山から森林まで広く生息し、とくに水田などの水辺でよく見られます。餌はカエルやオタマジャクシ、小魚などで、水によく入ることが知られています。性質はきわめて温和ですが、敵に遭遇すると威嚇行動をとることから毒蛇と誤解され、「咬まれればその日ばかり (日量, 日計)」と言われたことからこの名が付いたと言われています。さて、調査ではあちこちで遭遇することができるこのヘビですが、2013年8月28日に大台町大杉谷の栗ノ谷で確認したヒバカリについて報告します。

ヒバカリの体色は、茶褐色で背面にある黒褐色の斑点は目立たないタイプが一般的と思いますが、栗ノ谷で確認したヒバカリは全体的に色が濃く斑点もよく目立つ綺麗な個体でした(写真1)。翌日、大台町大杉谷の嘉茂助谷でも同色の個体が確認できました(写真2)。

栗ノ谷の個体は、河原の石の隙間にいるところを発見し、一旦逃げようとしたところでとぐろを巻かせた状態にし、カメラに納めてからようやく逃げようとしたところで尻尾を掴み捕獲しました。落ち着いた頃を見計らって計測するつもりでぶら下げたところ、口からポタポタと黒い何かを吐き出しました。ヒバカリの忌避行動か? と思いながら吐き出したモノを確認しようとした次の瞬間、なんと手元に60mmほど尾を残し、逃げてしまいました。突然のことに驚いて尾を投げ出すと、トカゲやカナヘビの「尾の自切」と同様ピクピクと地面で動き続けていました(写真3)。それはおおよそ5分以上続いたと思われます。

なお、吐き出したモノはナガレヒキガエルのオタマジャクシでした(写真4)。栗ノ谷には水面下にナガレヒキガエルのオタマジャクシが多数みられ、すでに手足の揃った個体もいましたが、まだ尾は消えておらず、上陸しているものは見られませんでした。ヒバカリは水中に潜って捕食していたのでしょう。

さて、食べていたオタマジャクシを吐き出したのが「忌避行動」なのか、また、「尾の自切」が意図的なのか偶発的なのか明確ではありませんが、この夏の経験報告でした。



写真1 栗ノ谷のヒバカリ



写真2 嘉茂助谷のヒバカリ (左上の黒いのがオタマジャクシ)



写真3 切れても動き続ける尾



写真4 吐き出されたオタマジャクシ

〈う え だ と し ひ こ : 津 市 久 居 一 色 町〉

勢田川を愉しむ

佐 野 明

私の職場は伊勢市の勢田川沿い、河口からおよそ6 km上流地点にあります。ここに通り始めて2年が過ぎました。

勢田川は支流も含めて、兩岸ともしっかりと護岸工事がなされ、まるで「中洲があってそこに草が生えている」状態はいけなかいのごとく、繰り返し浚渫（しゅんせつ）工事が行われています。そこに住む生物にとっては大変厳しく、生物を見るのを楽しみにしている人間にとってはまことに「苦々しい」管理がなされている河川です（写真1）。

かつてここは知人ぞ知るカメ・ウォッチングの適地で、多数のイシガメ、クサガメ、スッポン、アカミミガメを間近に見ることができたのですが（写真2、3）、上陸する場所の多くが失われ、今ではその数は激減してしまいました。

それでもたくましい動物たちは四季折々にいろいろな場面を見せ、愉しませてくれます。毎年3月には無数のボラの幼魚が黒い雲のようになって押し寄せ（写真4）、それを狙ってアオサギやダイサギ、カワウが集まってきます。また、カルガモやバンが繁殖し（写真5、6）、可愛いヒナの姿を楽しめます。満潮時には数十センチはあるボラとコイが仲良く泳いでいる姿も目にします。

今年の8月には連日、たくさんのアカエイが遡上してきました（写真7）。「事務イス用の座布団」くらいの大きさのエイが並んで泳ぐ姿は壮観でした。



写真1 満潮時の勢田川。きれいに護岸工事され、中洲はない。生き物観察における期待度は低い。



写真2 水面に浮かび上がったイシガメ。



写真3 甲羅干しするアカミミガメ。ちょっとわかりにくいですが、水中から顔をのぞかせている3頭を含め、14頭のアカミミガメが写っている。



写真4 早春に大挙して押し寄せるボラの大群。体長10cm程度のものが多いようだ。



写真5 抱卵するカルガモ。



写真6 浅瀬を歩くバンの巣立ちヒナ



写真7 勢田川を悠然と遡上するアカエイ

さらに一度だけですが、アカミミガメが、今や希少種のウナギの頭に噛みついていてのを見たこともあります。しばらく格闘した末、ウナギは逃げていきましたが、アカミミガメは食べようとして食いついたのでしょうか。

川幅が狭く、水深の浅い支流では多様な魚類を間近に観察できます。魚の名前がわかる人ならきっと（私よりも）もっと愉しめるでしょう。

繰り返しになりますが、勢田川は本当に生物にやさしくない川だと思います。たくましく生きる動物は魅力的ですが、そのような動物だけが生き残る川はけっして「豊かな川」とは言えないと思います。

〈さの あきら：津市河辺町〉

オキナガレガニの標本

篠 木 善 重

10年ほど前のことだが、標本採集に少しずつ目覚め出した頃、初めのうちは死んだ昆虫や打ちあがった海藻や貝などを標本にしていたが、やがて干潟や海岸で生きているカニ類も標本にするようになっていった。そんな頃、台風の影響で田中川河口に流れ着いた生きたオキナガレガニと出会った。

当時、数日來の時化が続き、たくさんの海藻や魚類、エビシガイ類、フジツボ類などが河芸町の海岸に漂着した。見つけたのは1個体だけで、砂の上を歩く動きは頼りなげであった。それまで一度も見たことのないカニで、手持ちの図鑑類を調べても種名は判明しなかった。



写真1 オキナガレガニ♀

5年ほど経ってから、三重大学図書館で『日本産蟹類』を眺めていて、ようやく沖流れ蟹と分かった。歩脚は長節が頗る幅広く、腕節・前節・指節には前縁・後縁に軟毛を密生している。この毛列は泳ぐのに役立つ（酒井，1976）。この記載から頼りなげに感じた本種の砂上での歩き方が納得できた。

オキナガレガニ *Planes cyaneus* (甲殻類：イワガニ科) は、外洋上を流木などについて漂流生活を送り、わが国の太平洋沿岸でふつうに見かける（内海，1996）。季節風・台風により岸に漂着したり、浜に打ち上げられる（三宅，1983）。三重県においては主に太平洋岸で見つかっているが、伊勢湾内においても松名瀬海岸での佐波征機氏の記録がある（短尾類分布調査研究会，1983）。また、若林（2004）はウミガメに付着していた本種を記録している。

本種の標本は採集から10年が経過しているが、飽かずにこれまで何十回も眺めてきた。種名が判明するまで何年もかかったこともあるが、流木やウミガメなどに付着して、あてもなく流れて大洋を旅する流れ者の生態を知るほどに同情を感じるものがあるからであろう。

採集標本：オキナガレガニ *Planes cyaneus* Dana：津市河芸町田中川河口，1♀（甲幅10mm），31-V. 2003，篠木善重採集・保管。

引用文献

- 酒井恒. 1976. 日本産蟹類 pp.773(英文) + pp.461(和文) + pls.251. 講談社.
三宅貞祥. 1983. 原色日本大型甲殻類図鑑(Ⅱ):pp.277, 保育社.
短尾類分布調査研究会. 1983. 伊勢湾および熊野灘北中部海域の短尾類相. 三重県立博物館研究報告 自然科学, 5:p.1-78.
内海富士夫（監修）. 1996. エコロン自然シリーズ 海岸動物:pp.196, 保育社.
若林郁夫. 2004. ウミガメに付着していたオキナガレガニの記録2例. 三重の生きものだより, (20):p.5.

〈しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1〉

困ったラベルのはなしー相可高校のオオダイガハラサンショウウオ標本

清水 善吉

本誌91号で河北均さんがラベルのことについて書いていました。そのなかで、昆虫標本にはデータラベル（採集地、採集年月日、採集者名）が必須とし、なぜかしら「coll.」と「leg.」の語源についての説明に紙面の大半を割いています。新しいウンチクが増えたことがよほど嬉しかったのでしよう。

私も、小型哺乳類（ネズミ・モグラ類）の調査を行った際には、必ず標本をつくるようにしています。また、爬虫類や両生類についても、三重県内には標本を残しているところはありませので、できるだけ標本化するようにしています。標本ですから、当然、データラベルをつけます。

厚手の紙に太めの糸をつけてラベルを自作し、鉛筆で「20130930 三重県大台町大杉谷大台ヶ原 coll. 清水善吉」等を書いて、標本の胴体の一部に結びつけます。鉛筆書きにするのは、標本をエタノール液浸にするため、マジックでは簡単に消えてしまいます。

ただ、最近はデータをパソコン管理するようになりましたので、ダイモテープに番号を刻印して、それを標本に結びつけるようにしています。これだと、標本を見ただけでは採集地などはわかりませんが、本当はラベルを二つつけておくといひなのでしょうが（写真1）、手間を考えると二の足を踏んでしまいます。

さて、いまでこそ標本にラベルをつけるのはあたり前になっていますが、かつてはそうではありませんでした。とくに学校に残されている標本にはラベルのないものが多くみられます。そのひとつが、本誌79号でも紹介した神戸高校の御在所岳産オオダイガハラサンショウウオの標本です。本当に御在所岳産であるなら北限生息地の標本となりますので大変重要ですが、この標本を自宅で保管していた故・角田保氏（元三重県立博物館・神戸高校）のご遺族と県立博物館との寄贈交渉が崩れ、この標本も含めてすべてを廃棄処分するということになってしまったようです。こののはなしは10年ほど前のことですので、すでに処分されているのかもしれませんが、唯一の証拠標本が失われた今となつては、御在所岳のオオダイガハラサンショウウオの謎解明の機会は永遠になくなってしまいました。

さて、御在所岳はオオダイガハラサンショウウオの北限の生息地ですが、その東限は松阪市大石町矢下谷（海拔350m）です。1955年12月3日に採集されたという標本が相可高校に保管されていると三重県立博物館研究紀要に報告されていますので（富田1980）、ぜひ見てみたいと思っていました。ただ、富田さんが確認されてから30年以上が経過していますので、こちらにも処分されているかとも思いつつ、旧知の同校生物教諭・竹上俊也先生を頼って生物教室の標本を見せてもらいました。該当標本は意外と簡単にみつき（写真2）、その姿形や計測値が報告とほぼ一致しましたので、富田さんが観察されたのもこの標本で間違いなさそうです。

標本そのものにはラベルはありませんが、標本ビンにラベルが貼り付けられています。が、読めません。最初の二文字「おほ」がかるうじて判読できる程度です。ここはひとつ科学？の力を借りてと



写真1 二つのラベルをつけたカスミサンショウウオ成体の標本



写真2 相可高校のオオダイガハラサンショウウオの標本。にじんでいゝ部分はノリをつけたか所

ということで、県教育委員会を通じて埋蔵文化財センターで「赤外線撮影」をしてもらうことにしました。同センターの田中久生さんがいろいろと設定を変えて撮影してくれましたが、残念ながら文字は浮かび上がってきませんでした（写真3）。田中さんによると、赤外線は炭素に反応するので、このラベルは炭素を含まない材質のペンで書かれたものではないかとのことでした、また、ラベルそのものの紙質も薄く、学校でよく使われるわら半紙のようにみえました。厚手の紙に強い筆圧で書くと、インクが消えても文字痕がトレースできる場合が多いそうですが、わら半紙ではどうしようもありません。



写真3 ラベルを赤外線撮影してみたが・・・

富田さんにお聞きすると、報告にあたって「ラベルを読んだように思う」とのことですので、当時は判読可能だったのでしょう。その際に、標本の写真は撮られていますので、ラベルの写ったものがないか探していただいています。残念ながらまだ見つかっていません。写真が見つければ新たにラベルを作成して添付するのですが、とりあえずは「松阪市大石町矢下谷（海拔約350m）1955年12月3日、三重県立博物館研究報告自然科学第2号（富田靖男1980）より、2013年9月18日清水善吉作成ラベル」のデータを付しておこうかと考えています。また、この標本はホルマリン液浸でしたので、一昼夜水洗いしてから75%エタノール液に移し替え、フタのすりあわせ部分をグリスで密閉し、さらにロウで封じる処置をしました（写真4）。



写真4 エタノール液浸とし、新たなラベル(裏)を添付した相可高校標本。古いラベル(手前)も絶対にとらない。

標本は標本として、現地の状況を把握することも必要と考え、2013年6月29日に調査を行いました。日中に矢下川（矢下谷）とその東隣をながれる谷川の上流域を探索し、後者の方が条件的に良さそうだったので、夜間調査は谷川上流で実施しました。林道の終点（海拔約300m）から作業道沿いに海拔400m地点までの溪流でオオダイガハラサンショウウオの幼生を探しましたが、この日は発見には至りませんでした。なお、林道終点付近の山林一帯には石垣が残っていたので、かつては耕作がなされていたものと思われます。昔は今よりも自然環境が豊かであったと思いがちですが、実際にはかなりの山奥まで人の生活圏になっていたことがわかります。

相可高校のオオダイガハラサンショウウオ標本について、ラベルは判読できず、またその産地での生息確認もできないという残念な結果になってしまいましたが、現地での夜間調査時にひとつだけおまけがありました。20時30分ころに谷川上流の山中（海拔約350m）で、木の枝にとまって「ジューイ ジー」と鳴いているミミズク類のヒナ2羽と、おそらくその親と思われる個体（「クウォ クウォ クォー」と鳴く）を確認しました。親鳥はライトを照らすとすぐに飛び去ってしまいましたが、ヒナの方はなんとか撮影できました（写真5）。写真を今堀聖史さんと高橋松人さんに見てもらったところ、オオコノハズクとのことでした。本種は、三重県レッドデータブック2005では情報不足種とされ、松阪市からの情報はないので記録しておきます。



写真5 オオコノハズクの子(2013年6月29日、松阪市大石町)

松阪市飯高町でオオツバメエダシャクを採集

松阪市飯高町で2013年6月8日から9日にかけて実施された、「三重県レッドデータブック2005」の改訂版（2015）編纂にかかわる合同調査において、オオツバメエダシャク *Amblychia angeronaria* Guenée を採集したので報告する。

本種は本州、四国、九州、南西諸島、中国、インド、ニューギニアなどに分布する、南方系の大型シャクガ科の一種で、三重県では現在のところ大台町大杉宮川ダム（松井，1993）および紀北町不動谷（間野，2006）で記録されている。三重県RDB2005では情報不足（DD）にランクされているので、新しい記録の一つとして活用されれば幸いである。なお、当夜はライトトラップ・カーテン法を実施したが、カーテンには飛来せず、道路沿いの薄暗い街灯で採集された（写真1）。記録は以下のようである。



写真1 オオツバメエダシャク

採集場所：松阪市飯高町赤桶つつじの里

採集年月日：2013年6月8日23時

前翅長：42mm，♂1頭

文献

松井弘見，1993．オオツバメエダシャクを三重県で採集．誘蛾燈．(131):16．

間野隆裕，2006．熊野灘沿岸のガ類．熊野灘沿岸照葉樹林の昆虫（三重昆虫談話会創立50周年記念事業），三重昆虫談話会：217-284．

〈富田靖男：松阪市川井町822〉

事務局から

○会報の原稿募集

会報「自然誌だより秋号」は12月発行予定です。観察記録や会への意見・要望，自然保護活動などについて，ふるってご投稿ください。

○みえ貝仲間の会誌を同封

三重貝ななま（代表 鈴木慎一）の活動に興味のある方は事務局の中優さんにご連絡ください（nakamasaru1284@castle.ocn.ne.jp）。

編 集 後 記

今夏は酷暑のうえにまったく雨がふらず，特異な天候でしたが，水不足や節水があまり大きな問題にもならず過ぎていったことに少々驚きました。人の節水意識の向上や節水技術の進歩のおかげ，あるいは人口減少の影響でしょうか（善）。

自然誌だより97号

発行日 2013年9月30日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp